

存廃のかかる状況のさなかに退官というのは、戦線離脱の趣でもあり、胸中複雑なものがあります。

退官の弁

教育人間科学部 教授
堀井 登志喜



5年間というのは決して短いとは言えませんが、私にとっては教職人生の最後だったこともあって、何を成したかは一向不明なまま、それこそ瞬く間に過ぎました。新潟の風土と人は大変温かく、仕事を離れてもこの地を去りがたい思い切なるものがあります。

教科教育学の世界には、どれほどのステップを刻み得たか、はなはだ心もとない限りですが、実践の場との接触が多く、県内の諸学校の先生方をはじめ、児童生徒のみなさんからも大きな力をいただき、改めて深甚の感謝を表します。

学生諸君は、朴訥でまじめな人柄が多く、温かく接してくれました。彼らの可能性に、新潟の教育の前途への希望を託したいと思います。

前任校を移る際にも、学部改革の真っ只中でしたが、今度もさらに一層困難を増した、存廃のかかる状況のさなかに退官というのは、戦線離脱の趣でもあり、胸中複雑なものがあります。うしろめたさと、一抹の安堵と、そして自身の行く末への不安がないまぜになっております。

少子化の時代でこそ、じっくりと教育に取り組む教師を育てるべきなのに、削減だ、統合だ、という騒ぎは、カイカクという鞭に右往左往する牧牛のようで甚だ残念です。

先生方の大いなる叡智と、学問教育に対する情熱と、つき進む意志の力で、ぜひこの難局を打開して、一層発展していただいくことを祈る次第です。

思い出 - ゼミ合宿 -

経済学部 教授
田中 章介



本学での在職期間が7年。その間に失業率3.1%から5%台へと悪化し、学生の最大関心事である就職をめぐる環境も一段と厳しくなった。私のゼミ生の就職活動や就職先も、その前半と後半では相違がみられる。

そのゼミ生との交流で思い出に残るのは、毎年夏休みの恒例となっていたゼミ合宿のことである。当然のことながら、参加は自由で強制されるものでないが、毎回出席率が高く、平均で一学年も名前後のゼミ生のほとんどが参加する。合宿の企画等は年長のゼミ長がリーダーシップをとり、自主的に運営される。具体的には夏休み前に選択した一冊の本を読了することが参加要件となり、初日分科会、二日目全体会議が開かれ、全員発言が求められる。と同時にコンパや観光などのレクリエーションが行われ、参加者全員の交流を深める。教師と学生や学生間の交流や親密さを促すために、こうしたゼミ合宿が欠くことのできない大事な役割を担っている。特に

教師と学生や学生間の交流や親密さを促すために、ゼミ合宿が欠くことのできない大事な役割を担っている。

退官

大学の部活動に加入していない学生の場合
は尚更その感が強い。

合宿地として咲花、瀬波、湯沢、麒麟山
の温泉地へ訪れたが、みんなの評価が高か
ったのが津川近くにある麒麟山温泉であ
った。費用、サービスが学生の合宿に相応
しいだけでなく、阿賀野川に面した宿から
の眺望が抜群に良い。川幅が300m位を
超える清流と遠くに飯豊連峰の山々が一
望できる。

将来、新潟へ来訪するときには、再び
訪れたいところである。

地域貢献と国際化におもう

理学部 教授
小林 巖雄

新潟大学に赴任して、3年10カ月になり、
この間、数百人もの学生と専門の地質学・
古生物学を通して語り合い、同じ釜の飯を
食べて山を歩く日々であったと思います。
大学は将来をつくる若い人を育てる場であ
って、そのために正しい認識と最新の知識を
もって若い学生とともに創造的研究をすす
めて行くことにある、と厳しかった先生や
先輩から聞いていました。教育と研究が
両輪となって走る大八車であると思いま
した。新潟での研究テーマに新潟と佐渡を
フィールドとすることにしたのもつい先頃
のようです。先人に学び追い越せという
言葉を頭に、好きな山歩きをはじめ、地
域の研究に飛び込みました。これが地域
への貢献につながる基になりました。昨
年末にはテレビ放送公開講座で越後平野
の大地の動きとその未来を県民に話すこ
とができたのは、喜びでした。国際化と
は人によりいろいろに受けとられていま



写真：2001年12月、ベトナムのメコン河デルタ
地域の調査にて

ます。それぞれの学問分野によってレ
ベルに違いがありますが、国際的レ
ベルの仕事をする、同じ立場で国際
的交流・共同研究をすることにあ
ると思います。新潟大学や黒川村
などの後援を受けて

今後も、本来の使命に沿った
大学人の総意と創造にみちた改革と
その進展を願っております。

大学院時代から研究を続けてきたバイオミ
ネラルにかかわる国際シンポジウムを開
催することができ、旧知から若者まで分
野の壁がない研究集会を開けましたし、
昨夏には研究科において隣国である韓
国との地質研究交流会を仲間と持つこ
ともできました。大学の改革はいまだ
到達点に達していません。今後も、
本来の使命に沿った大学人の総意と
創造にみちた改革とその進展を願
っております。

定年にあたって

理学部 助教授
東 正彬



角田山や弥彦山など散策に適した
場所に生まれ、また荒波の彼方には
佐渡が島をも眺望できるこの地で、
優秀な新潟大学の学生諸氏と歳月
を共にする事が出来たのは、私にと
って幸いな事であったと感謝して
おります。

自然科学研究科の威容も整いつつある
一方で、大学は今変革の時を迎えてお
り、また社会情勢も厳しい時にあるよ
うで、諸氏の置かれている状況もま
たこの先も、必ずしも安易なもの
では無いかも知れません。私が学生
だった時に伺って心に残っている中
から、

知は力である

という言葉をお伝えしたいと思います。

知は力である。